

京都大学	博士（ 文学 ）	氏名	関本 真乃
論文題目	『石清水物語』及び『苔の衣』の研究		
（論文内容の要旨） 本論文は、鎌倉時代中期、所謂後嵯峨院時代に成立したとされる作り物語『石清水物語』及び『苔の衣』について、実証的に考察するものである。後嵯峨院時代とは、仁治三年(一二四二)に後嵯峨院が即位して以降、文永九年(一二七二)に没するまでの約三十年間を指す。この期間中、文永八年には、後嵯峨院の後大宮院の下命によって、当時存在した二百余の物語から秀歌を選出した物語歌集『風葉和歌集』が編まれており、作り物語の享受・制作が盛んな時期であったことが窺える。『石清水物語』及び『苔の衣』も、『風葉和歌集』に和歌が複数採られていることから、文永八年までには成立していたことが明らかである。 序章では、両作品が成立したとされる後嵯峨院時代を中心に、鎌倉時代の『源氏物語』享受や「準拠」の概念について概観した。第一章及び第二章は『石清水物語』について、第三章から第五章までは『苔の衣』についての論考である。 第一章 『石清水物語』の主人公伊予守は、王朝物語では特異な「武士」という設定である。にも関わらず貴族的な側面に着目されがちであった伊予守の人物像について、武士らしさという点から再考を試みた。 まず、「伊予守」という呼称は、源氏の著名な武将義経・頼義、及び平家の武将維盛が伊予守であったことを髣髴させる。また、童名の「鹿島」は、鹿島神宮の祭神武甕槌神が東国の軍神であることに基づいた名であると考えられる。さらに伊予守は、幼くして鎌倉の八幡若宮に預けられて以来、長年八幡を信仰し、石清水八幡に恋の成就をも祈願する。彼が悲恋の末に出家を遂げる場所が「高雄」であるのも、当時の物語としては珍しい。高雄の神護寺は、元々「八幡之御願」によって建立された寺と考えられており、この当時も八幡との関係が深い。伊予守の生涯を貫く八幡信仰は、彼が典型的な源氏武士であることを示すものである。 加えて、伊予守の人物造型には、平維盛、西行という二人の武士像が影響を与えている。年立上の矛盾をも顧みず、伊予守と北方の結婚時の年齢を維盛夫妻と一致させることをはじめ、伊予守出家場面は、『平家物語』の維盛出家・入水場面に多くを負って描かれている。また、伊予守の出家時の年齢や自ら髻を切るという点には、『西行物語』に伝えられるような西行説話の影響が窺われる。そのうえ、伊予守の発言もしくは心中思惟においてのみ、西行の和歌に独特の表現が引用されていることから、元北面の武士である西行が、伊予守を描く際の一つのモデルとして参照された可能性は高い。 以上、『石清水物語』の主人公伊予守が、当時の信仰を背景に、また軍記物語や説話を幅広く利用することによって、いかにも武士らしい特徴を有する人物として意図的に造型されていることを検証した。			

第二章

『石清水物語』の女主人公（姫君）の人物造型には『源氏物語』の玉鬘や『夜の寝覚』の女君の影響が、姫君の兄については光源氏や薫の影響が指摘されているように、本作品の登場人物一人ひとは、様々な先行文学作品の印象的な場面や特徴を抽出し、それらを寄せ集めて描かれている。しかし、物語の中心となる男女主人公の関係性に焦点を当てた時、典拠として指摘されるものは意外と少なかった。

本章では、伊予守と姫君の関係が、光源氏と藤壺の関係を踏まえて描かれていることを、場面描写及び人物造型における表現の一致・類似から検証した。そして、伊予守と姫君の物語においては、個々の人物像における典拠以上に、光源氏と藤壺の関係性の方が、より重要で根幹的なモデルであることを述べた。

そのような観点から『石清水物語』を読み直してみると、子をなすことのない伊予守と姫君の物語は、光源氏と藤壺の物語から、親としての葛藤やお互い以外の他者の存在を切り捨て、思い合いながらも身分差ゆえ宿命的に結ばれ得ない男女の悲恋、という要素に焦点を絞っていることがわかる。「この世」で生きる男女の葛藤と成長を描いた『源氏物語』に対し、『石清水物語』の本質は、前世からの縁を有しながらも現世で結ばれず来世での一蓮托生を願うという、一人の男君と一人の女君の間で完結する悲恋を、わかりやすく描く恋愛小説なのである。

第三章

『苔の衣』の主人公と目される大将について、人物造型の基盤を明らかにし、その主人公性を考えた。

この物語の主要人物の系譜は、歴史上実在した、藤原道長の時代の摂関家を下敷きに構想されている。すなわち、大将を道長の息子の位置に置いて、その周りの人間関係を整理していくと、道長周辺の系譜とほぼ一致するのである。

加えて、大将に内親王降嫁の話が持ち上がり、女君への愛情から苦悩する点、大将の夢に亡き女君が現れ歌を詠む点、関白の息という立場を捨てて突然出家し聖の衣を着る点には、それぞれ『栄花物語』が伝える道長の息子たち（頼通・教通・顕信）の逸話が利用されている。特に大将が出家に至る過程において、道長の息子たちを集約したような造型がなされていることに注目される。

その意図は、関白嫡男にして唯一の男子である大将の出家遁世という、他に類を見ない衝撃的な出来事を語るにあたり、実在した摂関家子息たちの逸話に依拠した動機を与えることで、「実際にありえたかもしれない必然のこと」として説得力を持たせることにあったと考えられる。

作者がこれほどまで意を注いで描いた大将の出家遁世こそが、この物語の主題であることは疑いようがなく、またその主題を担う人物という意味で、大将が主人公であることは紛れもないのである。

第四章

『苔の衣』は年立に矛盾が目立ち、系譜にも不明な点が多いとされてきた。しかしこの物語が成立した当時、一般的に年立の整合性にはさほど意を払わない一方、系譜

への関心は相当に高かったと考えられる。本章では、『苔の衣』の複雑な人間関係を整理し、関白家と、対抗勢力である内大臣家及び左大臣家が競合する政治情勢を読み解き、いくつかの矛盾点を解明した。

その上で、『苔の衣』が史上実在した人物の系譜や逸話をいかに利用しているかを検証した。その結果、天皇家と関白家を中心とする、物語の根幹ともいえるべき系譜が、摂関政治全盛期の系譜をほぼ忠実になぞっていることを明らかにした。また、左大臣家は史上の小野宮流と小一条流の系譜を集約していること、内大臣家に至っては系譜ばかりでなく人物造型の面でも、中関白家の人物たちの逸話を取り込んでいることを、『栄花物語』の記述などと比較して検証した。

このように、実在した人物の系譜や逸話をふんだんに摂取する『苔の衣』は、『源氏物語』が学問研究の対象としても重視されるようになったこの時代に、おそらく『源氏物語』から学んだ「準拠」という方法を物語作者が活用した実例として、注目すべきものである。

第五章

『苔の衣』の最終巻（冬巻）は、主人公大将の出家後を描き、子供たちの世代に話の中心が移るため、それ以前の巻々とは性質を異にするように見える。本章では、一見蛇足と捉えられかねない冬巻の存在意義を問い直し、『苔の衣』全体を貫く主題があるかどうか考察した。

冬巻の中心人物である兵部卿宮には、『狭衣物語』の模倣が顕著に見られる。大将にも『狭衣物語』の影響は見られたのだが、その摂取の様相を比較すると、大将は狭衣がなし得なかった出家を実行する理想的な人物として描かれているのに対し、兵部卿宮は狭衣以上に自分本位で煩惱から抜け出せない点を取り分け強調されている。狭衣を間に挟んで、大将と兵部卿宮との対照性がくっきりと浮かび上がるのである。

冬巻巻末、春宮女御に取り憑いた兵部卿宮の物の怪を、大将が長年仏道修行を積んだ功力によって退散させる場面において、道心深い大将と執着深い兵部卿宮との対照は最も際立つ。つまり、物語全体から見た冬巻の意義は、出家遁世後の大将の修行専心ぶりを、兵部卿宮との比較において強調することにあったと言えよう。

すなわち、物語の主題は、冬巻まで終始一貫して、大将の類ない出家遁世とその仏道専心を描くことにありと考えられるのである。

(論文審査の結果の要旨)

本論文が研究対象とする『石清水物語』『苔の衣』は、いずれも鎌倉時代に都の貴族の文化圏で作られたとされる物語である。この種の物語は、近年中世王朝物語と称されるようになり、現代語訳付きのテキストが刊行されるなど普及も進みつつあるが、なお現代の読者からの共感を阻むものがあるように思われる。その理由の一つは、非常に狭い社会の中で制作され享受されたものであるため、作者も読者も同様の知識教養を持っていることを前提としている点にあらう。それは第一に『源氏物語』であり『狭衣物語』であり、『栄花物語』等を通して得られる歴史知識であった。物語作者はこれら先行作品を模倣することにためらいなく、むしろ積極的に利用することにより読者に何かを伝えようとしている。したがってこれらの物語を十全に理解するには、当時の作者と読者が共有していた知識教養にいかに依存しているかを明らかにすることが先決である。本論文は、このような立場から二作品を読み解こうとするものである。

たとえば第三章では、『苔の衣』の主人公である大将が、愛妻の死後、出家遁世に至るまでの物語において、藤原道長の三人の息子たち、頼通・教通・顕信の逸話が利用されていることを、『栄花物語』の記述と照らし合わせて突き止めた。そして、大将と同じく若くして突然出家した顕信ばかりでなく、頼通や教通の逸話をも組み込むことによって、摂関家の嫡男である大将が将来を擲って出家するという一大事を、説得力を持って描こうとしたのだと述べる。この物語の主題が大将の出家遁世にあることは題名からも推察されるが、作者がそこに特に力を注いでいることを先行作品の利用方法からも証明した好論である。このように作中人物の造型に史上の人物が関わっているという発想は、大将が出家の師と仰いだ聖との血縁関係が、歴史上実在した藤原顕信・高光という二人の遁世者の関係に合致することを、論者が発見したことにはじまる。大将と聖との系譜説明は、物語の文脈から見ればさほど必然性もなく唐突に現れるもので、書写の過程での誤写もあるらしく難解である。つい読み飛ばしてしまいそうなその記述を丁寧に読み解き、物語展開上の必要とはまた別の意味があることを見出した点は卓見と言えよう。

第四章は、第三章でも取り上げた系譜の問題に正面から取り組むものである。『苔の衣』の作中人物の関係を整理すると、やはり『栄花物語』に登場する人々の系譜と重なるところが多く、時には人物の逸話も含めて一致することを一つ一つ検証した。そして、物語を読むだけでは一見不明瞭な人間関係も、歴史上の系譜と重ね合わせることで判明することがあるという。系譜の一致は偶然の可能性も捨てきれず、作者がどこまで読者に読み取らせようとしていたかの見極めは慎重に行う必要があるが、作り物語といえど系譜への関心が高かった時代相を反映しているとの指摘は、当時の源氏学の動向とも関連するところがあり重要である。

『石清水物語』については、第二章で、男女主人公の不義の関係が『源氏物語』の光源氏と藤壺の関係を下敷きにしていることを、本文の細部に至るまで比較することによって論証し、その上で、『源氏物語』とはあえて設定を異にしたところこそ、この物語の本質が現れていると述べる。『石清水物語』には『源氏物語』の露骨な模倣があまりに多いせいか、光源氏と藤壺については意外に見過ごされてき

た感があるが、物語を理解する上で根幹的なものであることを主張する。第一章では、王朝物語としては珍しい「武士」という身分の主人公が、いかに武士らしく描かれているかを多様な角度から論じる。中でも、出家遁世した武士の代表ともいえるべき西行の面影を読み取ったことは、西行説話の受容の比較的早い例として、同時代および後代の物語、また他分野の作品の研究にも寄与するところがあるろう。

このように価値ある創見に富んだ本論文であるが、時に論の展開がなめらかでなく、論者の主張が正確につかみにくくなっている場合がある。材料を集めてくる力があることは十分証明されているので、あとはしっかりした設計図のもとに論を組み立ててゆく努力を一層望みたい。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、平成二十七年二月十七日、調査委員三名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第十四条第二項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。